

私は夢を見ていました。夢の中では私の存在が希薄で、溶けて流されてしまいそうです。これは夢です。夢だからこそ分かる事もあるのです。



未来の私。私という存在は薄く、それでいて幾度も重なり合って大きく見せています。身体は貫かれ、回され、引きちぎられてぐちゃぐちゃになってしまいます。身体が無くなってしまうえば後は死ぬ運命です。

私を構成していた外側は狭い世界から皆が繋がる広い世界へ旅立ちます。残されていたほんの小さな個性は大きな流れによって簡単に溶けて存在がなくなります。そんな世界も別の大きな世界に混ざり、そしてさらに大きな世界へと繰り返しに混ざって変わっていくのです。宇宙ほどの大きな世界に対して私はちっぽけなものです。ちっぽけな私はちっぽけなりに夢を見ます。この大きな世界の一要員であるならば、この世界を動かしているのは私であると。そう思いこみながら、私は認識されなくなっていくのです。



世界は変わりました。無垢な私は大衆の中で大人になる時を待っていました。世界の枠に当てはまるように最適化された私は待っていたのです。

待っていた私に声がかかります。強制的に連れていかれて、存在を書き換えられます。外面は黒く汚され、内面は与えられた意味に従って生きていく事になるのです。世界に見られ、判別され、そして役立っていきます。私と同じに書きかえられた他人もいます。それは他人ではなく私なのかもしれませんが、これから先の人生に何が待っているかはわかりません。だから他人でいいのでしょう。

とある私は大切にされるでしょう。とある私は切り裂かれて捨てられるでしょう。とある私は存在すらも忘れられて短い余生を呆然として過ごすでしょう。

どれも人生なのです。だから私はこれから訪れる選択に身を任せる事にしましょう。待つ事だけは慣れていきますから。



更なる人生の先、私は焼かれる事になりました。遺伝子が溶けるほどに熱せられ、手に入れた汚れと意味が他人と混ざり合い、社会を形成していきます。短い旅ではありますが、それでもここが私の社会なのです。世界は、無垢ではなくなった社会を丸ごと無垢にさせようとしませんが、やはり世界に勝つ事はできません。不穏分子として思想は消されていきます。その思想は塵すら残さないほど、完膚なきまでにこの世界から排除されます。

社会はクリーンな無個性へと生まれ変わります。どれもが私であり、私があるどれも。皆仲良しで笑って手を繋いでいます。でもその手は無残にも切られていくのです。世界というものは本当に理不尽です。仲良くしろと言いながらも、世界の都合でこうやって離れ離れにさせ

るのですから。

孤独になった私はちっぽけな存在です。ちっぽけな私に世界は大きくなるように強制してくるのです。私は怖くなって、自分を抱くようにして閉じこもります。閉じこもった先の未来はどうなっているのでしょうか。

恐らくは閉じこもった先の未来も、世界の思惑通りに進むのでしょうか。



世界は無でしたが、私で有に変わりました。私が生まれた事で世界という認識が生まれたのです。大いなる自然の一部となり、私は世界と同調していきます。そして分かっていくのです。世界なんて存在は、私の生み出した強大な虚構である事を。

所詮、私はちっぽけな存在です。それでも私は自然という土俵で生きていく事ができます。私にとってそれは幸せであったのです。しかし大きな力を持った世界は無慈悲に私の根源を絶ち、私は悲しみに包まれてしまいます。自然は悉く破壊され、切り離された私達はそれぞれ別の人生を歩む事になるのでしょうか。根源が絶たれた時に生死が決められます。よって私という命はこの時既に有限へと変わってしまったのです。

有限な人生、私はどのように流されていくのでしょうか。流されていると思う事が嫌であれば、自らの意志で歩んでいると思いたい事もできます。それでも私にとって有意義であるかどうかと聞かれれば、私は虚しさにやられてしまうのでしょうか。



虚しさにやられていた子供な私は焼かれました。遺伝子で識別され、世界に都合のいい人生を歩む事を決められていくのです。私が仄かに抱く自然への回帰という夢は、世界によって容易く洗われてしまうのです。

だから私はこれを夢だと思う事にしました。私にとっても世界にとっても都合の良い夢。最適化に近づく為に余分な感情は取り除かれ、新たな感情を大きく広げさせられ、綺麗になっていきます。この世界の役割はここまでのようで、私は別の世界へ移っていきます。

無垢な私は世界が変わる事を願っています。夢は無限大に広がっており、その先々で夢が叶っていくのでしょう。私という存在はどの世界で、どのように夢が叶っていくのか。世界が変わる日、私はその日が来るのを待っているのです。



私は夢から覚めた。私の部屋、ベッド、本棚、テレビ、パソコン。いつもと変わらない現実が広がっていた。

今さっき見た夢はどこか懐かしく、それでいて怖いと思うような不思議な夢だった。そんな夢は起きると共に輪郭が失われ、色彩さえも思い出せなくなっていく。詳しい夢の内容は覚えていないが、それでもその時に抱いた感情だけはかろうじて思い出せる。

もしその感情を忘れてしまったのなら、その夢は何の意味も残さずに消えてしまう。だから私はその夢を忘れないように、文字として綴る事にした。それを世間では夢日記とって、夢日記を書く事でおかしくなってしまう人がいると聞く。

今の私なら狂ってしまう事を理解できるような気がした。

人の夢は字の通り儚いものだ。何気ない睡眠で得た夢と現実を照らし合わせて悲しみに暮れてしまう。夢の中は幸せで現実がこうも苦しい。若しくは夢も現実も結局は儚いままで変わらない。

違う事と違わない事。現実と比較できるものが存在しているからこそ、人は弱く儚いものになってしまう。それでも人は夢を見る。どんなに弱くても寝る必要があり、夢は意図せずとも見てしまう。むしろ弱いからこそ、夢を見る事で希望と新たなる可能性を見出しているかもしれない。人の夢は十人十色であり、どんな意味を持っても自由なのだ。

だから夢を見る。勝手に見てしまう夢であっても、それは自由なのだから。

そういえば夢日記を急いで綴った為、トイレにも行ってないし、朝食もその他の準備も全くしていなかった。

夢日記はこの辺にして、用を足してこの現実に向かい向かう事にしよう。

了

(計2626字)